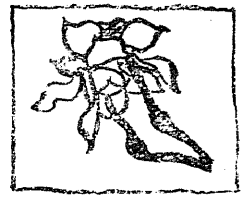

子供讃歌（一八）

倉橋惣三

一七　孫達の集い

1　孫児嬉戯之図

寛袍長杖の老翁の傍えに、一群の幼童達が嬉々として遊んでいる。――支那の古画に屢々見るほゝえましい構図である。支那画家の描く唐子の顔に個性のないことは、日本の浮世絵の子供の顔の類型的なのと共に、西欧の子供画に比して、常にものたりない点であるが、そのかわり、老翁の顔の理外利外閑々の顔には、東洋のどの絵でも好感をもたされるのである。

さて、幼童嬉戯之図に二いろある。一つは布袋図や仙人図に見る、途上児の群或は雲外児の群であり、一つは多孫翁の家庭児の群である。後者の場合、こんなに多数の孫児がと怪しまれることもあるが、支那を旅行して大家族制の研究の目的で、豪族の家庭を訪問するに及んで、その疑いは解けた。そういう大家庭の広い中庭には、そうした大量の孫児群が見られることがあつても不思議はないのである。それに取かこまれた老翁の好々爺顔も、ありそうな一幅の幸福画である。

さて、この幸福は、一人々々の孫を膝に抱いているときの幸福とは少し違う。すなわち、この場合の孫は個でなくて多の孫達である。つまり孫群の楽しい集団に涵されている幸福である。そこで老翁の言つているのも『みんな仲がいゝね』である。たとえば、オーケストラを聴いているとき、一づゝの楽器を楽んでいるのでなく、全体のシンフォ

ニーに陶酔しているのと同じである。それと同じく孫群の階調音が、老翁の心をとろけさせているのである。

階調音を聴くことは、誰れにも楽しい。しかも、それを最も楽んでいる一人は、その楽団のコングクターでなかろうか。その階音がうまくいつているときの、彼の快さそうな肩を見るがいゝ。それがうまくいつちしないときのいら〳〵しい後姿を見るがいゝ。たゞ異るのは、指揮者の黒の燕尾服が、きちんとシツクであるのと、老翁の褞袍がだぶ〳〵とゆつたりしていることだけだ。

ところで家庭の幼児群ではなくてきようだい、いとこの特別集団である。偶然に寄りあつている群ではなくて、老翁から特別のみんなとして抱かれる群である。同じ根から芽ばえた特定の花群である。

すべて、子供達の親しい集りを見るのは楽しい。しかも、老翁にとつて、きようだい、いとこの和合を見るのは特に楽しい。親としてもそうだが、おじいちやん、おばあちやんの孫に対する抱擁の心理において、特にそうである。そこで、彼も、孫児嬉戯の図に題していつも達筆を以て記したくなるのである。

藹哉、兄弟姉妹従兄弟姉妹。慈眼視衆孫。

2 幼老園

血縁という文字がある。『血は水よりも濃し』という言葉もある。こういうことは生理学者に任しておこう。血縁何等族の律法もあるが、民法親族篇の条文だ。この子供讃歌の中でいう愛情は、そういう因果ばなしめいた愛や、修身教科書的の愛ではない。底の底には、そういうつながりあいも、運命的因になつてるかも知らないが、こゝの花園で老園丁の心を喜ばすのは、そうして、その愛の均等の配分を楽しまされるのも、いつしよに育つて来た小さい花達が現在一つの園に睦み咲いているのを見る喜びである。

きようだい、いとこだから仲よい筈だというよりは、親しい仲合でこそ真にきようだい、いとこだというのである。いつしよの育ちでも、仲がよくなかつたら、きようだいではない。仲がよくても、いつしよに育てられなくては、いとこ同志とはいえない。

『きようだいは他人の始まり』という、昔の人の諺がある。すごい程穿つた言い方であり、世間の荒庭には往々ある実際なのかもしれない、況んや、いとこにおいておやとなつては、現実になり過ぎるかもしれない。しかし、兎に

かく、おじいちやん、おばあちやんの花園でうたわれる子供讃歌の一節ではない。まゝならぬ荒野が原に、真に人と人とが暮しあつている楽団を、家庭というところに見出そうとする彼は、その中でも、孫児同志のきようだい愛と、いとこ愛とを、その花園に咲く、一段と色の濃い花の蕾と見るのである。

これを、人の世の理想としていうことが、どれ程の広い適用性をもたせ得るか、彼は知らない。たゞ、彼自らが一人子として育ち、家庭愛といえば、親子の愛の外を知らずに育つた彼としては、わが子達のきようだいの愛というものを、如何に羨ましい幸福として見たことであろう。また、きようだいの和を以て親を喜ばすという経験をもつたことのない彼として、彼の子らが見せてくれるきようだい愛を、人世至楽の光景として見、更に又、目の前に見る孫達のきようだい愛を人生最幸の観景として見ることを、何人も諒として呉れることだろう。いとこはきようだいと一つではないが、おじいちやん、おばあちやんの花園における孫達としては、同じ花園の花の群である。ひとしく、老園丁を幸福にしてくれる花の群である。

× × × ×

彼は養老院という文字を余り好きでないが、幼老園という門標なら、この、大して美しくはないが、しかしいつも、明るい小園の柴折戸に掲げていゝと思つている。